

大正デモクラシー

村政の推移 この期の村政の推移は、前述日露戦争後の村政のほぼ延長線上にあるが、第一次世界大戦後の不況―農村問題のなかで漸次変貌することになる。以下弘岡上ノ村「村会議事録」弘岡上公民館蔵等により、その推移を辿ることにしよう。町村制制定の趣旨により、基本財産の造成、名誉村長による村治等は執拗なまでに維持されたが、社会の変動に対処するための新しい姿勢も出でくる。とくに繁忙化する関係事務の合理化のために、たとえば弘岡上ノ村では「測板式丈量器械」を、大正五年（一九一六）購入したことであって、「土地分割地目変換等につき、本器を利用して丈量を了したるものは、税務署も異議なく又総ての点に於て便利」と、村会で村長は説明する弘岡上ノ村「村会議事録」。すでに大正三年（一九一四）三月吾川郡役所では、郡内役場吏員のために統計講習会を開く「土陽新聞」。これは上からの要請であって、やがて大正九年（一九二〇）十月一日の国勢調査に連なるものであるが、こうした要請は村政処理の合理化であって、村長、助役、収入役、書記（農会技手）によつては、すでに処理できない繁忙が生じつつあったことである。

こうして推移する村政の中で注意されるのは、前述村是の調査策定であって、「土陽新聞」大正五年（一九一六）三月十日によれば、政府は郡長を通じて大いにこれを推進し、吾川郡では弘岡上、森山、芳原の村是が優れたと同紙四月一日は伝えている。しかしながら国税、地方税の皺寄せで経費支出を極端なまでに渋らざるをえず、そのため名誉村長に固執した状態では、有能な村政担当者はえられない。弘岡上ノ村「村会議事録」大正八年

（一九一九）二月二十七日には、「大正七年（一九一八）に於ては、不幸村長に二回、助役に一回、収入役に三回の欠員を生じ、自然事務滞滯を来たし」と事務報告を行っているが、すべて馬鹿らしいほどの薄給では、嫌気がさすのも無理ではなく、地主層とはいえそうそう犠牲に耐えられないはずである。

すでに、明治末期以後西分村の村政が大きく暗礁に乗り上げた時、弘岡上ノ村の逸材小田玉城が村長として迎えられ、ついに難局を打開したこと前述したが、この期にも、たとえば大正四年（一九一五）六月十二日の「土陽新聞」によれば、諸木村で紛争があり、秋山村甲殿港関係から村長が告発されるという問題があった。同紙は愛村の士が奮起しているので、村治はやがて改善されようと期待しているが、問題は人物をえることであり、そのためには適正な待遇が必要である。なお「細川義昌日記」大正十一年（一九二二）一月二十八日によれば、当時秋山村では秋山、甲殿両小学校合併問題が起り、「郡長、郡視学も出張」合併同意を秋山村会で説得したが、甲殿側の同意が得られない。「土陽新聞」同年五月七日によれば、なお解決を見ていない。直接不便となる甲殿甫家の人びとが最後迄渋っている。ついに解決を見るにいたらなかったが、学校合併は前記村長の人物力量とはまた別に困難な問題である。

第一次世界大戦中の繁栄は、米価、繭価等諸産物及び労賃の値上りとして、急速に地方にも影響したが、村政には歳出の膨張として別の意義を持ってくる。すなわち後述の教員の給料引き上げ、あるいは村吏員の増俸である。いま前掲弘岡上ノ村「村会議事録」から左表を作製した。財政膨張の姿である。

年次	大正七年	同八年	同九年	同十年
予算	五、一三四円	六、五〇〇円	一〇、八九七円	一〇、八四六円

大正七年（一九一八）から同十年（一九二二）の間に約倍増である。追加予算によって増俸しながら物価を追う¹。教員の場合は郡長を通じて上から要請があったが、村吏員の場合そうした上からの指導が少なかったものであって、これが吏員給の教員給に遅れた一つの契機であり、後不況の中で、吏員給との対比から教員給に問題の生じるところである。なおこうして膨張した村財政が、早くもほとんど同時に不況に襲われることになるが、この点は昭和前期で問題としよう。

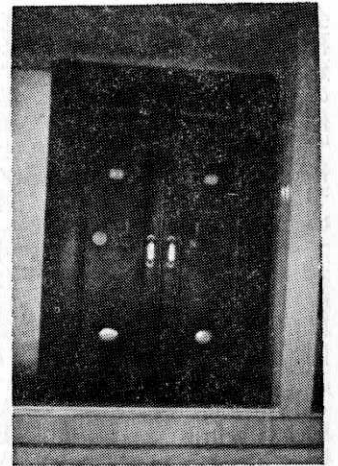
ところで大正期は政党内閣成立期であり、したがって政党勢力の村政侵入期でもあった。とくに明治末期以来改進黨系勢力の浸透しつつあった農村へ、大正政変を契機に、その流れをくむ立憲同志会―憲政会勢力が強化される。合理主義的な門田益穂は同志会を支持し、浜口雄幸の代議士当選を喜んでいる「門田益穂日記」。しかしながら伝統的に農村に強い政友会は、原敬総裁の高知県遊説以来党勢を拡大する。原敬が暗殺された後であるが、「細川義昌日記」によれば、大正十一年（一九二二）二月十五日、秋山村では「蓼原貞一村内挙げて政友会へ入党に付き紹介を頼みに来る。飲んで承諾す」という動きがあり、同日記同月二十四日には、入党個人十七人をあげている。弘岡上ノ村有志の「廿日会記録」にもこの前年に、「地方的利益問題の爲には政友会入会」をとあつて、同じ動きを示している。こうした動きは、単に地方的利益のために政党勢力を利用、ひいては政党腐敗に連らなると考えるべきではなく、後述地主制の破綻とも考え合すべきではなからうか。なお久しい間地方自治を監督指導した郡制は、大正十二年（一九二三）四月より、また郡役所も同十五年（一九二五）より廃止となり、さらに一種の兩院制を地方自治に持ち込んでいた一、二級等級別議員選挙は、大正十年（一九二二）廃止となり、ついで大正十五年（一九二六）には、普通法成立による町村会議員選挙制の改正も行なわれる。これら改正の結果については、昭和前期において考えてみよう。

農会と産業組合 明治後半期農政が問題となった時、各村単位で農会が活動し、その下部組織として、各部落に設置された農事改良実行組合があった。前掲「廿日会記録」大正三年（一九一四）三月二十日には、地方改良のために「各部落共同一致して、実行組合を起し農事の改良を期するにあり」と強調している。「西分村史」にも、各部落の実行組合の活動を伝える。ところで農会の活動については、弘岡上ノ村「村会議事録」に「産業は主として村農会の事業に移し」と、連年村長が村会に報告しているように、村長を会長として農政を担当したが、この活動がようやく時代に取り残されるようになる。

もともと農会の活動した時期は、なお比較的農村の安定した時であった。第一次世界大戦中及びその後の時期、すなわち資本主義経済に農村が激しく揺り動かされるようになれば、従来の農会の技術的指導による増産一本槍では、農村の現実に対処できなくなる。より流通面および資金面への指導が要請されることになる。これは従来からの農会技術員とは、別の人物を必要とするのであって、経済的な素養能力を持つ人が求められる。これは別に技術員の待遇にも問題がある。薄給の上にも薄給な技術員にはほとんどなりてがない。いわんや人材をやである。弘岡上ノ村「村会議事録」大正八年（一九一九）二月二十七日に、村長は議員の質問に答えて、

近來村役場に推薦する人に乏しく、傍々村農会技手の如きは殆んど皆無と云う次第にて、農村の爲には誠に遺憾の事と信じます。故に、一面には村が相当の人を養成する意味に於て補助をなし、農会の許す限り村事務をも研究せしむる方針にて、旧來より多額の補助を与えたと云う考えにて、此の案に出したものです。

と予算増加の説明をする。この説明によれば、すでに農会活動の中心をなす技術員の独立性は失なわれているが、事態は深刻であつて農会廃止の村も出てくる。「門田益穂日記」大正九年（一九二〇）七月三十日には、「村農会再建の件」について益穂は同志と動いているが、同年十一月一日にも「農会再立の件に付き参会」とある。弘



庫金組産岡弘旧
支所川連芸園
(所支)

岡中ノ村ではこの時点で村農会は活動停止であったと思われる。より資金面、流通面で農家が協力団結する産業組合の活動開始は、全国的にはほぼ農会と同期であったが、春野地方ではかなり後れてくる。「西分村史」によれば、西分信用組合は明治四十三年（一九一〇）開基、大正二年（一九一三）その活動を生産、販売組合として拡大している。同じ大正二年（一九一三）四月仁西村にも、えんどう販売目的に信用販売組合の結成がなされている。「土

陽新聞」。また弘岡上ノ村「村会議事録」大正二年（一九一三）二月二十八日には、「紫雲英販売組合」とあって、弘岡地方にさかんであったれんげ種採取に関連して、組合が生まれているが、こうした動きが全村的な産業組合結成へとなる。

「細川義昌日記」大正七年（一九一八）三月二十六日には、「川島遊亀信用組合の件話しに来る。自分も調印す」とあって、この年秋山村では信用組合が成立する。同日記大正九年（一九二〇）七月二十四日にも、「信用組合惣会を午後一時に開く」と順調である。同日記大正十一年（一九二二）五月七日には、組合建物を新築上棟、懇親会も開かれる。「門田益穂日記」によれば、弘岡上中両村の連合の産業組合の結成と活動は克明に示され、また門田瑞穂氏蔵「祭詞」―門田益穂葬儀祭文―には、簡明にその間の事情が記されている。この場合大正十年（一九二二）七月のれんげ種販売組合結成が契機となり、ついに大正十二年（一九二三）二月、弘岡信用販売購買利用組合として発足する。とくに同年一月の「農業倉庫」建設は大きな試みであり、また同年八月十五日開設の青物市場にもその積極性が示される。同日記同年七月十五日の農業倉庫上棟式には、

祈りし甲斐もなく当日は風強く雨甚だし、然れども延期する事なく施行の準備せり。一般会議三百名、其の他余興参覧者數百名に及ぶ。午後二時總會を起す。果物葉菜を販売する決議をなせり。其の後倉庫業務規程改正、手数料改正をなすべく、後満場異議なく可決せり。午後三時に挙式あり。盛大なりし、終て開宴せり。一般開宴二百名別室三十名位なりし。

淡々と事務的な筆致で綴られた記事は、しかしながら戦後の恐慌を憂えた農民の、期待に答えようとする産業組合の意気込みをじゅうぶんに示している。時しも銀行経営の不安もあり、農村―農民の組合に寄せる期待は大であった。自作農出身で経営の才能をそなえた篤農家が、団結して都市資本主義に挑戦する姿こそ産業組合である。なおこうした時代を背景に、弘岡中出身小川澄夫（一八七八―不明）は高知師範卒後高知市で県、市経済界に活動する。その活動の状態は、「門田益穂日記」にも出ている。また、弘岡上出身中山克己（一八八四―一九五四）、西分出身中村繁喜（一八八一―一九六七）も実業界に成功した。

同和問題と水平社 明治四年（一八七二）の解放令以後にも、同和地区の人たちには屈辱と貧苦を強制する差別が続いたが、その間漸次に経済的地位を高め、たとえばれんげ種の採取等に進出成功するものも出るとともに、差別に対する怒りは盛りあがる。とくに大正デモクラシーは、そうした機運をいっそう高めるものであった。用水、学校等の問題で地区外と対立することも少なくないうえ、元気のよい青年はまた怒りの余り争い沙汰に及ぶこともある。大正初期公道会という全国組織の県―地方支部では、こうした問題解決のために地区の人たちに呼びかけ、地方改良の一環として同和問題に上から働きかける。春野地方にもこれに答えて、大正三年（一九一四）五月成美会が生まれ、青年たちを中心に風俗、衛生、産業の改善向上に努力する「土陽新聞」。

しかしながらこうした外からの働きかけよりも、より注意されるのは地区の人たちの自己解放運動である。大正十一年（一九二二）三月全国水平社が京都で結成されたのは、まさにそうした要請に答えるものであって、大



国沢 亀 肖像
(春野町社会福祉協議会蔵)

式を挙行する。当初森山村新川の盛楽座を会場に予定したが、借りることができない、関係の深い寺院も会場を借さない始末であった。同和問題に理解のあった弘岡上ノ村法学士中内為樹(一八八九—一九三七)の厚意によって、百笑座が借りられたものである。後述の岡崎精郎も同和問題の理解者であり、寺田一氏(一八九七—)らとともに推進者であった。ここにも大正デモクラシーがある。発会式では宣言、綱領が採択高らかに発表される。長い抑圧と屈従の生活の、一日も早く終らんことをの願いをこめたものであった。しかしながらなお夜明けは容易ではなかった。

「高知県人名辞典」によれば、前記国沢亀は、貞四郎の七男として生まれ、父の死後兄の養子となった。もともと人力車夫を本業としたが、やがて解放運動の先駆的闘士として活動する。大正十一年(一九二二)の全国水産社の結成に当っては、その執行委員となった。県内でも活動し、ことに前記、公道会は融和団体であり、ごまかしであって有害無益と批判し、同和地区民自身による絶対の解放をとなえる。そのため警察からはたえず弾圧を受ける。また大正十五年(一九二六)五月福岡市で開かれた第五回全国水産社大会には、高知県代表として参

正デモクラシーの一つの典型であった。春野地方にこの動きが伝わったのは、少しおくれて大正十四年(一九二五)のことである。世は普通選挙法成立へと大きく前進する年であった。聴き込みによれば、和歌山県出身の指導者栗須一郎を迎え、春野地方出身者の国沢亀(一八九四—一九三四)らが中心となり、若き日の森岡深太氏(一九〇二—)らの奮起によって、あらゆる困難を排除して弘岡上ノ村の百笑館で、吾川郡弘岡水産社発会

加、法規委員、交渉委員にえらばれたが、無産政党支持については、時期尚早論を称えて注目されたという。不幸昭和九年(一九三四)弾圧と生活難のなかで死去する。時代に先じた人であった。なお町社会福祉協議会には、弘岡水産社創立発会式記念写真があり、苦闘のなかに今日を築いた多くの先覚者の姿を伝えている。
地主小作制の破綻 「西分村史」には、当時のきわめて貴重な地主小作関係史料が収められている。米作収入を中心に一部を左に表示した。

○小作料(一反歩)

区	分	上	田	中	田	下	田
収	量	二石四		二石二		二石〇一石四	
小	作	料	二・〇	一・八		一・五	一・〇

○地主収益(一反歩小作料一石八、米価一石十五円)

収	入	支	出	収	益
二七円〇〇	五円一五〇	〇円二〇〇	五円三五	二二円六五	
	公	課	雑		
		費			
			計		

○自作収益(同前)

収	入	支	出	収	益
四〇円〇〇	一〇円〇〇	八円七〇	一八円七〇	二二円三〇	
	人	夫	賃		
		其	他		
		計			

○小作収益(同前)

収 入	支 出		損 金 ⁽²⁾
	人 夫 賃	小作料其他	
四〇〇〇〇	一〇〇〇〇	三二二二	四二二二
			一四二二

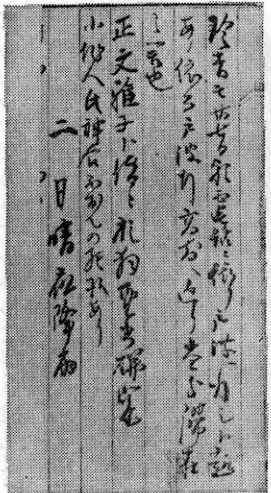
ほとんど信じられないような過酷な地主小作関係が、明治維新後継続して破綻しなかったのは、まったく不思議であると言えよう。しかしながら、いわゆる大正デモクラシーのなかで大きく揺いでくる。とくに米騒動の年の米価の異常な値上りは、小作農の堪忍袋の緒を切らせることになる。もっともすでに「西分村史」の伝えるように、明治二十七、八年(一八九四―五)頃からは、「年末に於て小作人より小作料を持参し、払い出る時地主の家は必ず酒肴を用意し饗応する慣例」も廃止となり、両者の関係は冷却対立する傾向を示したものである。ことに第一次世界大戦中の鉱工業の繁栄は、都市への人口の集中となり、その点からも地主小作関係は動揺する。一般に地主層の雇う家事労働の従事者の態度にも、この期の間関係の峻しさが示される。

「細川義昌日記」大正六年(一九一七)六月二十七日には、給仕をする女中の態度について克明な記録があり、「食事の給仕のとき、茶碗がかやる計り盛り上げ突っ立ち居る」、「塩を命ずれば腹立てしごとく大音をさせほうりつけ」、「茶を命ずれば土びんを逆に為し、茶碗に一杯台にこぼるゝ」ほどに注ぐ。注意すれば「自分衣類等を風呂敷に包み私は帰ります」というのである。同様のことはまた別の女中について、翌年の二月にもあった。止める義昌の妻を突き飛ばして帰ろうとする。考えてみれば当時の少女には、窮屈な女中奉公より工場に働きに行くのが、はるかに魅力があったわけである。

米騒動が大正七年(一九一八)七月二十三日富山県に起った後、同年八月中旬全国に波及、高知県においても同月十五、六日高知市の事態は峻悪となったが、すでに「土陽新聞」七月二十三日には、米の売り惜しみで米価一升三十一銭となり、市民は飢餓に類する情態となっている。ところで米騒動の農村への影響は、小作農の怒りとなって、都市とはまた別の動きを呈する。「細川義昌日記」によれば、秋山村では左のような小作農の動きがあった。

- 九月一日、小作人氏神に会う。ふおんの模様なり。
- 同 二日、本日も小作人集合あり、巡查三名来り。夜遊亀来り明日地主も(会)開く話あり。自分不同意を表す。されども絶対にあらず。
- 同 三日、宛て当りに付き地主の集合あり、自分へ行かず。
- 同 四日、小作集合あり、的場の佐太郎ら三人地主へ無方なる相談あり、之を却説す。
- 同 五日、昨日小作より改めて楠馬ら三人岡崎、稲本へ更に相談あり。明日地主会を開く事を遊亀より掛合い来る。
- 同 六日、朝遊亀へ本日地主会欠席の旨挨拶に行き、話を聞く。

簡単ではあるが事態の切迫は理解される。もっとも九日の日記には、「小作会を解散し地主に対する件は、各自



「細川義昌日記」
(高知市民図書館蔵)

の自由交渉」となるのであって、まだ後の小作争議とは趣きを異にする。しかしながらこの時点で、後に岡崎精郎の活動する基盤がつくられていることは知られるだろう。

大正七年(一九一八)米騒動以後、検見の要請の激増することとは、この年不作であった関係ばかりでないことは、「小作団体として一般的に宛石の三割方減少を主張」「吉良家文書」



岡本慶之助肖像

集りしも男子としては一人もこれなく」であった。このような情態はまったく一般的であったといえる。

大正八年（一九一九）のスペイン感冒で、仁ノの名医岡本慶之助（一八六五—一九一九）は病死する。日露戦争に軍医として松山に勤務した慶之助は、すぐれた外科医師を修得し、自宅には当時の農村には見ることのできない外科手術室を設け、吾川、高岡両郡にわたり患者の来る者多く、二棟の長屋風病室に

にも明らかである。しかしながら検見には地主の恩恵と小作の懇願という関係がある。やがて小作農の要求は適正小作料決定を求めることになる。また大正末期にはなお一般に好況の名残があり、小作料を回る紛争は、小作人の土地返却―地主の自作となる場合も少なくなかった。生粋の地主的感覚の持ち主であった細川義昌は、検見のほかその点についても注意すべき記事を残している。「細川義昌日記」大正十一年（一九二二）五月十二日には、

西諸木田見合せ並びに嘉平に逢い、草取り並びに古江一切れと中川原稲植付。婦。雇。い。方。を頼みたり。熊尾を連れ中川原の悪（芥）引きに行き、焼却方馬吉に頼み、□□へ行き中川原同人作地を、田。捲。え。賃。并びに稲植付け通行する事を直接懸け合い承諾を得たり。株田松吾粉に田こしらえを受。負。わ。ず。

雇傭労働で地主制危機を切り抜けようと努力している。こうした地主の姿勢は、昭和の小作争議における地主の土地取り上げに連なるものであって、すでに山雨は迫っていたものといえよう。国もこの年から自作農の維持創設に資金を提供する。もっともあまり効果はなかった。

スペイン感冒と結核 大正デモクラシーを支える社会的条件は、まことに劣悪かつ弱体であった。その端的な現われは医療と社会保障である。「社会保障は皆無であったが、医療もなお不完全で伝染病の脅威は絶え間がなく、小児の疫痢、大人のチフス等のほか、大正九年（一九二〇）にはコレラの恐怖さえあった「細川義昌日記」。一度伝染病に罹った場合避病院にほとんど遺棄される。弘岡上ノ村「村会議事録」大正七年（一九一八）十月二十八日によれば、赤痢に罹った病人を避病院に収容したところ、「親族より番人付き添い来りしも、病気に付き立ち去られ遂に村費にて番人を雇い」という貧弱な施設であった。しかも入院した病人の家族は、母子四人チフスで自宅療養という惨憺たる情態であったので、村長は止むなく村費で家庭療養のための番人を雇う。ところが収入役は「伝染病院に入らざる患家に番人給の支払いは出来」ないとする。もっともようであるが、全体として何とも無惨なことである。

ことに怖れ嫌われた病気に、この期猖獗をきわめた結核があった。療養費に困って死ぬまで働き、しかも近所を怖れ恥じて、ほとんど村八分同様の関係が生まれる。「細川義昌日記」大正七年（一九一八）十月二十七日には、結核で死亡した隣人の娘の死について、「隣家の者寄り集り、同人病氣は肺ケツカクにて伝染の恐れあるを以て、此の度彼の家へは一切立ち込まず、外輪に於いて穴掘り等の手伝いを為すの申し合せを為す」となる。隣人の家もまた遠慮して、「一切手伝いを謝絶」するのであった。強い隣人の団結も結核の恐怖には及ばなかったものである。時しも都市より農村への結核の蔓延は激しく、同様の悲劇は各地に多かつたものである。

このように忌み嫌われたものではなかったが、脚氣も都市の繁栄をもたらした病氣であり、多くの若者の命を奪ったが、ことに大正七年―八年（一九一八―一九一九）と大流行したスペイン感冒も多くの人びと、とくに妊婦、産婦の生命を奪う。「細川義昌日記」大正七年（一九一八）十一月十九日には、悔みに行った親戚の高岡郡多ノ郷村大谷（須崎市）について、同家では二人が感冒で病死したが、「実に目も当てられざる有り様なり。故に親類寄り

は患者が溢れるほどであった。「細川義昌日記」、「門田益穂日記」にも、慶之助の診察、治療を受けた記事が多く、その死は人びとに惜しまれ、死後無医村への不安は仁西村々会でも論じられている「仁西村々会議事録」。なお秋山村で北村茂（一八六五—一九五六）が、産婦人科の名医の名を伝えられたものこの期である。医療水準の地方的興隆の一時期であったといえよう。

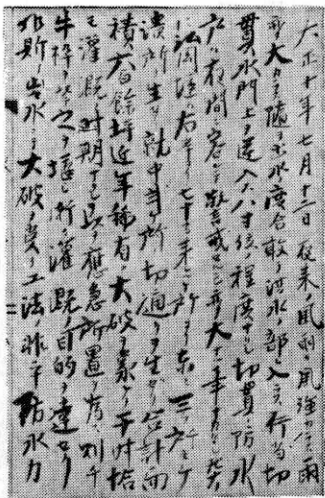
水防、水利、耕地整理の前進

水防 明治末期より大正期にかけて台頭した篤農家的村落指導者に、弘岡中ノ村の門田益穂があった。几張面な益穂は多くの史料を残した。すでに前述引用したところであるが、ここでまず大正元年（一九一〇）着手、同四年（一九一五）完成の行当―森山間仁淀川東岸堤防に関する記録を見ることにしよう。この事業によって仁淀川洪水の氾濫はほとんど防がれ、さらに戦後の拡張強化の前提となったものである。「西分村史」によって紹介したが、前述明治末期、仁淀川西岸堤防強化のための高石村宮崎（土佐市）水越堤防強化の問題のうえに、さらに県の進めた八田村（伊野町）以南、仁淀川河身正常化への施設の問題も加わり、仁淀川東岸堤防強化工事進行中も、当時の村落指導者を大いに苦慮させたものである。河を挟んでの兩岸の利害の対立調停と、工事費の補助との両刀を使って、県はこうした問題によくやく指導力を発揮するようになるが、一面これは河川等に科学的研究が進められ、すぐれた技術を身に付けた県庁職員の出現も関係する。

まず、大正四年（一九一五）四月二十四日付、門田益穂の「工事報告書」「門田家文書」を見よう。抄出したものである。

当堤防改修は大正元年十一月を以て起工し、大正四年四月を以て終了せり。其の主要材料は土及び石材にして、土は付近の畑及び山より請負いを以て採取し、其の量九千七百八十八坪五勺、此の価格一万四千六十二円九十二銭一厘、石材は荒倉山より請負いを以て供給を受く。其の量式十八万六千二百四十五貫、此の価格七百三十二円九十七銭貳厘、石灰式千七百七十七俵、此の価格四百四十三円貳十銭、砂利式十式坪、此の価格七十二円六拾銭、嶽土四十四坪、此の価格百四十五円二十銭、敷地四百五十三坪三合四勺、此の価格七百三十三円六十八銭八厘、工夫二万一千九百十三人、此の価格八千二百四十八円七十七銭三厘、その他材料及び雑費四千五百九十九円六十八銭一厘、合計工費二万八千九百五十八円九十五銭五厘、開工日数四百六十三日。

と工事の概要を説明するとともに、「頼りなき天災に対しては容易の断言を用ゆる能わずと雖ども、既往の大洪水面より五尺以上の高さ、之れに伴なう施設を為したるを以て、蓋し本堤防修築の目的を期待し得べきもの」とする。責任を果した関係者の心中を察することができる。明治二十七年（一八九四）成立の水防組合は、時代の進運に即して明治四十二年（一九〇九）その規則を改正したが、その改正の成果を象徴するものである。なお



「門田益穂日記」(門田瑞穂氏蔵)

「門田益穂日記」によれば、大正六年（一九一七）度から同九年（一九二〇）度にかけて部分的強化が進められ、同十年（一九二一）三月九日、「堤防事務所に於いて終了報告祭典施行」となる。同月二十日益穂は改めて水利組合の常設委員に選挙される「同日記」。

しかしながらこうした成果にけっして満足していないのは、つぎに示す「高吾両郡水害組合堤防保護に関する略歴」「門田

家文書」である。高石村(土佐市)水越嵩上げ堤防化の由来を縷々説明した後、ついにここ水越に「式間以上の嵩上げをなし、一滴の漏水せしめざる」にいたったことは、「高石村用石の大部分の利益にして、結果は唯に東岸たる吾川堤防を圧迫するのみならず、高岡郡の上位堤防を害する事となり終れり矣」と抗議する。さらに続けていう。水越堤防化は、現実に吾川郡森山村堤防外の畑地の崩壊流失となって現われる。すなわち

従来吾川郡森山村新川沖の渡舟場付近より、水心は南方に倅し対岸堤防の脚部を通過し在りて、増水の場合水越を越え自由に排水しつゝ在りしもの、水越百五十間間の水路を断ちし結果、水圧は反対に東岸畑地を圧迫し流失せるものにして、水心の東進するに随い、水路は倅じて土砂を巻き川原を造るものと推定せらる。

というのである。しかも事は水越堤防化としてすでに終っている。将来についての県当局への要望は、仁淀河身改良工事への慎重な配慮を求めたものであって、「森山方面の適當の地点に制水設備をなし、ツルワカ(土佐市芝にて水身変更せしものを、更に南方に倅せしめ、現在の国土流失の大損害を防ぎ、延いて吾郡組合堤防に及ぼす大危害を防止するは、目下仁淀川制水上最大の急務」と叫んでいる。改めてこうした先覚者によって、われらの郷土が水害から守られてきたことに感謝すべきではなからうか。

水利 門田益穂は大正期相当長期にわたって、弘岡井筋の運営責任者―常設委員として勤務、その指揮下に浜田貞美―後常設委員―らの手を置いて、用水の供給、堰、用水路の管理に従ったが、とくに常設委員に選挙された大正十年(一九二二)を中心に、これに関する相当の記録を残した「門田家文書」。以下これをもとにしてこの期の水利関係の歴史を綴らう。

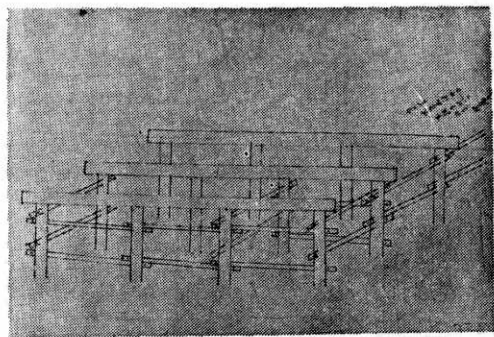
まず「門田益穂日記」大正十一年(一九二二)六月九日には、「諸木根木谷北行溝水かゝらず非常に困難せりと、西分以東通水する事と定め、告示」と、用水不足のための例の通水を実施する。同月二十日には甲殿の申し出によって、この方面にも通水の手筈をする。また同日記には九月十五日「本夕堀池の下の川水多くして刈り揚げに困却すとの事実を認め、本夕喜をして一尺位減水するよう八田大閘を閉じさしむ」と用水の調節をする。こうした処置はこの年に限ったことでもなく、また門田益穂に限ったことでもなく、井奉行―常設委員のいわば本務中の本務である。

ところで「門田家文書」に「仮堰施行並びに臨時修繕工事概況」がある。抄出すれば、

大正十年七月十三日夜来の暴風雨に弘岡堰大欠潰、式力所の切り通りを生ぜり。尔来降雨ありて増水又増水為めに調査する事能わず、拾九日に至り堰上水尺余の時危険を冒し検す。こぎ手式人浜田工手と四人にて之れに当る。忽ち切れ通り流され下流に矢を射るが如く飛沫をあげ、舟又水半ばに達す。流砕、落石にあたり転覆信に髪を容れざりし、漸くにして目的箇所を達し調査する事を得。

危険を冒して職務を遂行、実地調査の結果直ちに仮堰に着工する。すなわち同文書「臨時修繕工事概況」によれば、修繕箇所は大正九年(一九二〇)洪水に欠潰、同十年(一九二二)四月以降半ば修繕の箇所であった。ために「新に入れし土台砕流失せる等、甚だ手もどりの損失」を受ける。工事は七月三十日より九月九日までの間二十日間行なわれ、総計費千七百十七円十七銭を要している。こうしたいわば応急修理はほとんど連年のことで、さながらに賽の川原の積み石である。兼山以来繰り返されたことであろう。

大正期といえば科学技術の地方普及の時代でもあった。抜本的工事と考えた弘岡井筋関係者は、大正十一年(一九二二)より相当大掛りの改修を行なう。「門田益穂日記」大正十一年(一九二二)八月二十八日には、「本日本利水害共に県に交渉すべく行く」とあり、また翌年二月二十一日同日記には、「県の樫谷技師及び小松技手」が仁淀川視察に来る。これに対して弘岡上、中岡村長と益穂らは陳情する。どうしても県の力を借りる必要が



木工 沈床 図 (門田瑞穂氏蔵)

多い。注意されるのは、同日記大正十二年(一九二三)八月五日に、本日堰の平面図作製の為め、県の整理課前田正形を雇い、日曜日なるを以て来り測定してくれる。薄暮迄従事す。

と、おそらく当時問題となってくる耕地整理課の技術者の力を借りる。几張面な益穂はその労に対して一円三十五銭の謝礼をしている。同年十月二十八日の日記には、「正形氏来り八田圃の縦断、横断」の図面も作製する。なお同日記同年二月八日には新川の鎌田店に、「セメント大樽二丁分(袋入式つ)を、諸木落山着にて八円五十銭にて大樽七丁分請負」わせている。また同日記には枠用ボルト注文、あるいはトロッコ用レールの借用の記事がある。図面と云いセメントと云い、またボルト、レール等、いずれも新しい技術による弘岡井筋改良への盛り上げる動きである。これがやがて昭和初期の八田堰大改修への前提となる。門田瑞穂氏よりの聴込みによれば、当時益穂は前田正形調製の図に感嘆していたという。優れた村落指導者も科学の進歩には参ったのであろうか。⁽³⁾ 潔く技術に頭を下げたとすればまた床しい限りである。

耕地整理

「細川義昌日記」大正四年(一九一五)一月七日には、

小嶋喜太郎来り藤崎宛て地。地。上。げ。の。相。談。を。為。す。凡。そ。百。五。拾。坪。計。り、一。坪。平均。五。寸。乃。至。六。寸。を。上。げ。る。筈。す。森。節。次。に。相。談。し。同。人。も。上。地。す。る。な。れ。ば。六。寸。と。し、然。ら。ざ。れ。ば。五。寸。と。す。上。げ。地。費。用。壹。坪。壹。寸。に。付。き。米。壹。合。の。事、着。手。の。節。は。立。ち。合。い。上。げ。る。べき。坪。数。を。確。定。す。る。筈。明。年。より。式。升。五。合。允。増。収。と。し、惣。私。い。米。を。ま。し。式。斗。五。升。詰。め。と。為。す。約。束。也。

とある。加治子増収を狙って地主が土地改良に乗り出している。この工事は同年二月二十四日終る。同日記に「地揚げ終るに付き、喜太郎立ち合いの上入れ掉し、受負人共へ賃米を渡す」となる。「土陽新聞」同年七月六日にも、吾川郡弘岡下ノ村耕地整理のため起債三千元を申請したとある。いずれも耕地整理の開始期として注意されるものである。

「吉良家文書」には、翌大正五年(一九一六)五月十六日付、吉良禎吉の「耕地整理施行認可申請書」がある。これは前記「土陽新聞」の記事と関連するものであって、禎吉が耕地整理を計画した、弘岡下ノ村「久万ノ前」の約二反九畝は、その上流に「吾川郡弘岡下ノ村耕地整理地区」があったという。前述起債は許可となり耕地整理は進行したものである。地主個人よりは組合による協力がもちろん望ましいと云える。ところで吉良禎吉の前記「申請書」には、耕地整理に関する、村落指導者の理解が示されてはなはだ興味がある。抄出してみよう。

地積の経済

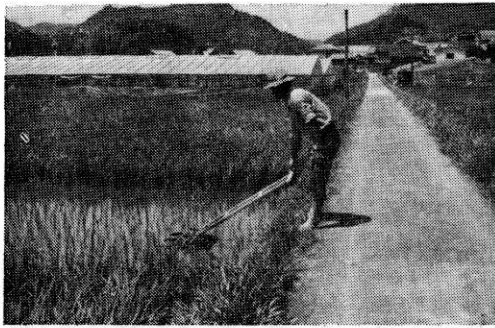
従前の耕地は区画不整、溝渠畦畔の屈曲偏倚甚だしかりしも、整地の結果其の区画を整然拡大し、溝渠畦畔等総て之れを直通的整理する為め、増歩約三畝歩を得べし。

労力の節減

従前の耕地は其の区画不整にして、耕作上並びに溝畔の修繕等に多大の労力を要せしに、整理後は区画の拡大整然たる⁽⁴⁾と、溝渠の及ぼす水害を免れ得て、牛馬耕其の他一般的労力を省くこと大なり。

排水上の便

以上のような利益をあげて、耕地整理を予算三百四十四円八銭で施工しようとする。成功すれば面積は三畝増加するだけでなく、洪水氾濫の害を避け、また多くの労働が節約できるといっているのである。すでに「細川義昌日記」には土地の嵩上げを行なっているが、一般には吉良禎吉の計画のように、区画整理のために溝渠を直線的にし、増反を図るものであった。したがって嵩上げによる湿田の乾田化は、昭和初年以後の食糧増産―二毛作田の



水稲除草器(現在)

増加として、次の段階に大いに推進される。後述するところである。
 思えば、兼山が用水路建設による畑地の水田化を推進して以来、ここに二、三十年、排水中心に新しい村造りがこの期より進められることは、一つの画期として注意されよう。地主は小作料に安座して土地への投資をおおむね怠ったが、中には前述のような生産力的な地主もあった。しかしながら大勢は自作農の団結による組合の力であったといえよう。

土佐―高知県のデンマーク

多毛作 大正期の日本の農業―農村指導に、重要な役割を果した愛知県立農林学校校長山崎延吉は、大正六年(一九一七)高知県を訪れて演説し、その得意のいわゆる多角農業の経営を強く懇えたが、その先進地はヨーロッパのデンマークである。また愛知県の安城(市)付近の農村であった。原則として、有畜農業とともに、単位面積当りに多くの労力を投入して多収穫をあげるもので、いわゆる多毛作を理想としたが、これはいわば日本の農業の極限といえることができる。春野地方が恵まれた自然的歴史的条件と、耕作農民の努力によって、土佐―高知県のデンマークと呼ばれたのは自然の成り行きで、見事な多毛作が展開する。すでにその基盤は近世末に築かれていたものが、明治をへてこの期に、都市の繁栄―資本主義発達を契機に開花したものである。いま主として史料を「門田益穂日記」に求めてこの期を語ろう。

稲作としては、明治後半期につづいて、各部落毎の実行組合を中心に苗代での病虫害駆除、試作田、正条植え、機械除草、成熟期の害虫駆除が進められたのであって、たとえば同日記大正八年(一九一九)五月十四日に

「今市部落の苗床検査を農会より請負」うて実施する等例証は多く、米価値上りを反映して稲作が熱心に進められ、同日記大正六年(一九一七)等には、稲の品種に固城、会津城、大神力、新撰赤坊主、唐岩が見え、その他穀良都も多い。肥料も従来のれんげ(げ)、堆肥、土肥、石灰のほかすでに硫酸、大豆粕、過磷酸石灰も使用されたが、同日記大正八年(一九一九)七月七日に、「本月初めて五号燐酸を試む」と意欲的である。門田益穂の「調査簿」「門田家文書」によれば、同家は、大正五年(一九一六)七反八畝の水田から五十八俵の米の収穫をあげる。反当平均約三石である。驚くほかはない。積極的な益穂は、同日記大正十年(一九二二)九月二十一日によれば、稲の脱穀に「精農式」脱穀機を試験的使用する。足踏脱穀機普及はこの期米価値上りを背景に進む。

大正七年(一九一八)の米価の暴騰による米騒動は、一般に食糧危機とも受け取られ、したがって麦作の奨励となる。ここに登場したのがいわゆる改良麦作である。後戦時中には翼賛壮年団によって、ほとんど血眼で奨励された食糧難克服のための麦の栽培法であった。広巾、薄蒔き、土入れ、麦踏みによって、反当十俵は軽いというものであった。前記「調査簿」によれば、大正八年(一九一九)門田家では、麦作を「全部改良蒔」とするも雨量多く、施肥不足であったという。改良麦作はこの期より普及する。

さて、吾南地方とくに弘岡三カ村と森山、秋山両村にこの期盛大を極めたれんげ種の採取と販売について語ろう。「門田益穂日記」には、すでに明治四十四年(一九一九)七月二十九日に、「技手近森の依頼により種を取り纏め久礼町(中土佐町)に送る」ため、自宅でいわば隣組の協力で荷造りする。総

額約二石であった。以後連年発展を続ける。とくにその協力がやがて農村問題切迫の中で、産業組合への道を辿ったことはすでに前述した。種の増収を目指して同日記には、大正六年（一九一七）三月二日に、「磷酸をレンゲ種取りに入れる」等金肥を施用するようになる。

秋山大根、弘岡大根で特に有名な大根、あるいは弘岡大蕪で有名なかぶの栽培は、都市人口の増大でこの期大いに促進される。大正七年（一九一八）頃弘岡三カ村、森山、秋山両村で計百七十八町歩の栽培面積と、十万円以上の収入をあげたという「土陽新聞」。とくにこれらは漬物として、たとえば甲殿の関千代馬（一八七九—一九四三）らによって、阪神地方に出荷されることが多かったが、その繁栄を象徴したのが、左にあげる「門田益穂日記」大正十二年（一九二三）九月七日、八日の記事である。まず七日には

県農務課より課長及び技師其の他三名来り居れり。今回東京市其の他付近の大震災に付き、高知県庁より天祐丸を借り切り。物資の運送をなす事となり、急劇行ふ事となりとて、其の準備をなす相談にあう。依て直ちに其の準備の爲め舟を借るべく新川に行き、警察に行き準備せり。又課長一行は新川藤尾に宿泊、其の所に森山村長其の他打ち合せを了し、午後十一時帰宅す。

その翌日には

本日は雨を冒して青年団、軍人団の協力にて大根漬三百樽送る事に定む。其の準備と其の世話に終日す。樽は新川舟又は貨車にて行く。大部分農業倉庫にて取り扱いせり。夜に入りて漸く終る。下ノ村青年、軍人会等も手伝いくれる。

当時門田家一戸でも大根漬を約五十樽製造した。五カ村の大根漬は莫大な数量にのぼったものである。もちろん生野菜のままでも高知市や近くの在町に売却される。米、麦、れんげ、だいこん、かぶとまさに多毛作であり、土佐—高知県のデンマークと呼ばれるにまったく相応しい。

ところで「西分村史」によれば、同地の筍もまたこの期大いに発展する。近世文化年間同村勘蔵が浦戸（高知市）より持ち帰った竹苗は、同村十田を中心にしだいに拡がる。土質に恵まれて良質の筍を生産し、大正期ついに三万貫を超え、高知市場での声価は県下一と折紙を付けられ、同市場をへて京阪神地方に出荷される。明治末高橋誠郎らは罐詰製造を試みたが失敗する。なおその時期ではなかったであろう。もっとも大正に入ってから、村内第一の栽培家中山泉（一八八五—一九四四）は、筍の大坂直送を試みている。いずれもこの期の都市の発達に答えたものである。

ここで芳原村と仁西村の蘭草について語ることにする。芳原村では備後蘭を栽培し、これを畳表、莫塵とする。同地には湿地が多く自然一毛作田であった。蘭草によって二毛作となる。すでに明治期より紙の生産に刺激された西分村の荷造用仕茸藪とともに重要な生産となったが、明治二十年（一八八七）同村上田千束が、岡山県産花筍の影響を受けて研究をはじめ、ついで同二十四年（一九一〇）高知市の門田馬次の協力をえ、芳原村に花筍製造所を開く。以後蘭草の栽培と畳表の製造は、この刺激によってさかんとする。もっとも花筍は衰えたが、蘭草は付近の低湿地水田に拡大する。つぎに仁西村とくに仁ノの蘭草は七島蘭であって、同地にもまた低湿地が多く好適であったが、この場合畳表というよりは、むしろ養蚕用の網—蚕筍として人気を呼んだものであった。

なお芳原村では、畳表の材料の糸にする黄麻がさかんに栽培された。同村における大正七年（一九一八）頃の蘭草と黄麻の生産量は、左表のとおりである「土陽新聞」。

種別	数量	重	価	格
蘭草	四五、〇〇〇貫		一〇、三五〇円	
黄麻	一、六〇〇〃		一、二九六〃	

年次	大正四年	同五年	同六年	同七年	同八年
収入	五〇円三三	六〇円二八	四六円七九	一四三円七四	一〇一円三七
年次	大正九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年
収入	一〇九円五八	一八〇円七八	三〇六円二四	二五七円八八	三二〇円三一

こうして生産者は「契約」として大資本に隷属させられ、好況の中でも繭の値動きに苦しめられるが、同日記大正十二年（一九二二）六月三日には、「新川に繭を持って行くも、下落のためいる事と定めたり」と、抵抗を示しているが、これは門田益穂にはじめてできることであって、一般には困難なことである。いま「門田家文書」から繭の値上りを主原因としたこの期の養蚕収入の概略を示そう。

前田春美氏来り片倉の契約者として、蚕の繭先買い契約に來り、壹升式円拾式錢に契約せり。

大正十一年（一九二一）頃春野地方にも及んでくる。「門田益穂日記」同年五月三十一日に、

とあり、以後二十九日には「楠治泊り番に行く」、また五月三日、五日にも同様泊り番に行っている。ついに同月十一日には「えびらむす、釜出来自分第一番にむす」と蚕具の消毒をしたうえで、「共同蚕児を本日取り別ける」としていよいよ自宅で飼うわけである。約半月間の共同飼育は、指導者によるすぐれた管理とともに、農家の時間を省くこととなる。また平素家庭に閉じこめられた女性には、解放された社交の場を与える。

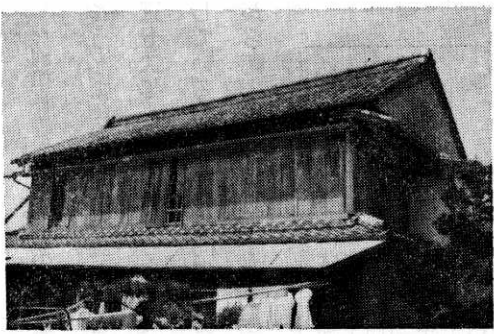
楠治森共同養蚕所へ行き逗留す。

四月二十七日には、女中の

地主ながらも生産的であった細川義昌は、養蚕についても「細川義昌日記」に貴重な記録を残したが、この期上からも大いに進められたものに稚蚕共同飼育があった。各村各部落に大流行する。同日記大正六年（一九一七）さて、この期における養蚕は、ほとんどすべての小作農から、一部日雇い層にまでも及び、現在のハウス園芸に比してさらにその層の厚いものであった。とくに春蚕の上簇前後約二十日間、一部の蚕室―二階建瓦葺き―のある富農を除き、ほとんどの農家は居宅を蚕に占領され、納屋や物置きで寝る始末であった。上簇の前後には田植え、麦刈りもあり、顔色にも疲労がありありと現われていた。おそらくあれほどの激しい労働は過去にもまた未来にもないことであろう。

養蚕 大正期の農村には階層によって激しい対照があった。ともに第一次世界大戦によるものであって、農産物の値上りから生まれたものである。同じ原因から反対の結果が現われたのは、地主小作制という極端からであるの言うまでもない。とくに米価の値上りは地主小作関係を破綻に追い込んだこと前述したところであるが、反面繭の値上りはこれらの対立を緩和させた観がある。したがって世界恐慌による繭の値下りは、ついに地主小作関係を抜き差しならぬものにする。後述するところである。

洪水に苦しめられることの多い仁淀川沿いのいわゆる須賀は、この期桑畑として最高に利用されたが、仁西村西畑では、元祖柳井伊太郎（一八五五―一九四一）によるえんどうの栽培がさかんであった。「土陽新聞」大正二年（一九一三）四月二十五日には、仁西村でえんどうの販売のため信用販賣組合を結成したとある。やがて大正九年（一九二〇）には弘岡上ノ村の川原にも拡がり、広大な仁淀川沿いの川原にえんどうが広く栽培されたのであった。また、たまねぎ、じゃがいもの普及もこの期であり、果樹栽培ではみかんにネーブル等いわゆる雑柑が衰え、温州が交代して生産されたほか、弘岡下ノ村等にはなしがさかんに栽培されている。



旧蚕室(西込幸雄氏邸)

約十年間に六倍の収入増である。驚くべき数字といえよう。

このような養蚕業の発達に支えられて、春野地方に蚕種製造業が発達するのは自然である。明治後半期より多くの製造家が出たが、蚕病予防の見地から淘汰が進められ、しだいに設備の整備したものに集中する。この期おおいに栄えたのは、弘岡中ノ村の西込為治(一八八一—一九六三)と、弘岡下ノ村の門田重喜(一八七九—一九四二)であって、県下でも知られていた。西込為治は農業経営から転向した企業家で、優良種を生産し、しばしば共進会に出品優等賞状を受けた西込家蔵。盛時には製造蚕種年間二万枚にも及び、季節時には三十人ほどの女子を、近村から雇っていたという。「門田益穂日記」大正十一年(一九二二)七月二日には、宴会の二次会に村の有志「同行

九人にて西込蚕種製造所に行く」とある。「門田家文書」には、大正九年(一九二〇)春蚕に「欧支」翌年の春蚕に「日支」と、当時一代雑種の飼育が示され、蚕種には画期的な研究の進展があった。同日記にはまた、大正十三年(一九二四)の春蚕に「小関の種」とあり、西込と併称された高岡郡北原村(土佐市)の小関蚕種製造所の製品も紹介されている。

「細川義昌日記」大正十一年(一九二二)五月二十三日には、「桑葉を拾貫匁こき、明日売る仕度を為す」とあって、養蚕の盛大となるにつれ、桑葉の売買も行なわれる。市場は西分村増井、森山村新川、弘岡上ノ村才川岸と各所に立ち、年により、日によって相場の変動も大で、養蚕家を一喜一憂させる。同日記大正九年(一九二〇)五月十八日には、「昨日の市の相場は九拾銭、八拾銭にてありし」と驚いている。「門田家文書」所収「調査簿」

にも、大正二年(一九一三)に

本年の桑葉は非常の高価にて、十年来の珍事なり。初め五月十日頃より式十五銭内外の相場なりしに、十四、五日頃一時下落の徴を呈し、十八、九銭となれり、然るに一兩日より漸次上り式十四、五日頃となるや、参十銭、四十銭、五十銭、六十銭となり、高岡、高知方面には七十銭以上となり、且つ人により当底不引合いとなるや、非常の盛蚕を放棄して、桑売りと化せしもの幾人あるやも知れず。若しそれ蚕をすてず其の儘飼養せば、桑葉不足を生ずべき感ありし。桑を市場に出すには、五月二十日頃より式十五、六日迄を可とす。

養蚕家は桑葉自給が原則であったが、異常とまでいえるようにその層を拡大した当時は、桑葉不足に苦しむ農家も少なくはなかった。現金に苦しんだ当時の農家は、桑葉の市場価格に苦しみ、ついには折角の蚕を川に流す者まで出る始末であった。また借金までして求めた桑で飼った蚕の繭が、予想に反して安いこともないではなかった。この期は研究が進んで病害はよほど減少したが、繭の市場価格の変動は、養蚕農家にとって後門の狼であったといえよう。まさに資本主義下の農業である。

なお養蚕とは別に「仁西村々会議事録」春野町役場蔵 大正四年(一九一五)三月十五日には、地引き網の改良袋に二十円の補助が計上されたとある。こうした改良も各方面で進められている。

交通、通信

人力車全盛 県道高知—中村線(宇和島道)は別にして、春野地方の道路は、ほとんど郡道として明治三十年(一八九七)代より開発されたものである。大正期にはいってもこの傾向は続けられ、かつて西分村を南北二分

しての対立の原因となった弘岡下―横浜線も着工の運びとなる。開始年代を伝える史料に接しないが、大正十二年（一九二二）四月の郡制廃止を控えて、郡道の県道移管が進められた時、すなわち大正十年（一九二二）未成のままでこの路線は県道移管となる。以後この期に県道として一応の完成を見たものである。大正期は、政友会が地方開発をアピールして党勢を拡張したのであって、その中核は道路建設であった。政友会の伝統的勢力の大であった吾川郡には、自然その恩恵も考えられよう。

「仁西村々会議事録」によれば、村長は大正五年（一九一六）三月道路改修積立金三千円を、毎年六百円五カ年間に達成することを提案している。これは「門田益穂日記」同年一月十三日の郡道「西畑線起工等に関する指し、郡土工費負担金である。」「細川義昌日記」大正五年（一九一六）三月四日―五日には、当時秋山村で甲殿井筋堤塘部を村道に拡張構築が為されたが、これが、井筋の中を狭め流水を阻害するとして甲殿側より抗議された事件が起っている。仲裁を依頼された義昌は、甲殿住民と示談に成功する。すなわち該当の場所の「堤の側を切り取り、堤裏へ根石垣を式三尺築き立て川巾を広くする」等、とにかくすべて秋山側は「川巾を広め」ることに努力を誓う。下流水田に死活的な水利確保と、道路建設推進の調和を図った努力である。なお同日記大正十一年（一九二二）十一月二十一日には、諸木村「宮ノ前より戸原^{（ひら）}行道路開鑿」のため、義昌所有の地所の一部の売り渡しを同村長より求められたのに対し、「隣地横田氏同様の代価にて買収に応ずる旨」を快諾している。これが現に利用度の高い東諸木の南北線であって、この時点で建設が進められる。弘岡上ノ村「廿日会記録」によれば、大正二年（一九一三）早くも荒倉トンネル計画がある方面より進められる。また上ノ村「村会議事録」には、大正七年（一九一八）村道改修計画がおおいに推進される。

さてこれらの道路はもとより徒歩、車馬の利用するところであったが、日露戦争頃開始の浦戸湾内巡航船の交通は、春野地方の東半を長浜村（高知市）經由で高知市へと導く、かつての新川川水路の半分を短縮する結果となり、長浜の通称お蔵の前に上陸した後、徒歩あるいは人力車で帰家するもの、また川船でここまで下って巡航に乗り換えるものと繁昌する。もっとも一面「門田益穂日記」大正十三年（一九二四）には、井筋側壁損傷から復の通行に反対している。実際には水運の終わりは近付いていた。新川川の川船の衰えゆく姿であった。

人力車といえば、この期とくに第一次世界大戦中の好況の中で全盛期を迎える。細川義昌一家は、その収入の多くを人力車の乗車賃に支払ったのではないかと思われるほどに、これを利用してはいるが、「細川義昌日記」大正七年（一九一八）六月二十二日には、人力車が西分になくて出高を中止したこと、また同年の十一月五日には、予約した人力車が来ずついにわらじがけで出高したとある。とくに婚礼シーズンには建場に一台もない始末である。土地のない日雇い層の人びとで、気力と体力を持った者はこの仕事を新たにはじめる。同日記には、大正六年（一九一七）十月二日、義昌は高岡（土佐市）で人力車の顛倒する事故にあう。同様のことはまた西分坂でもあった。「今日初めて車を曳きし由」と新しい魅力ある職業であった。体力気力に物云わせて産をなしていく者もである。なお自転車もこの時期速かに普及するが「門田家文書」、また荷車も同じである。

もっとも人力車の強敵自動車は、早くもこの期に現われる。自動車は主として陸路香川、徳島両県から導入されたらしく、当時ごく一部、たとえば政治家の遊説等に利用される。「細川義昌日記」大正四年（一九一五）三月二十二日には、当時の交通機関が三つ示されて興味がある。長岡郡大杉村（大豊町）の政談演説会に臨むため、義昌は後免（南国市）まで電車、そこから現地まで二人曳き人力車、同地馬瀬付近は自動車というのである。当時の道路が自動車を受け容れるのには、大きな無理があったと思われるが、時代を反映して急速に拡大する。同日記大正六年（一九一七）十一月十五日には、

自動車。雇い切り。千鶴、静、愛、末を連れ高岡へ行き自動車を降る。本日途中毎々機械にくるい停車修繕等を為す為め大いに遅れたり。式時半に出立四時に着す。自分のみ人力車を雇い戸波辻に五時過ぎ着す。餘は歩行。一時間遅れ着す。

これらはなほだ興味がある。徒歩、人力車、自動車と過渡期の重層的な交通模様である。同日記大正七年（一九一八）十二月十一日には、「明朝八時の自動車切符を求めたるに付き」とあって、早くも定期自動車が高知市を中心が発着する。ただ春野地方の自動車には仁淀川架橋問題があった。後述しよう。この時点はいわば第二の文明開化であって、大正六年（一九一七）十月三十日には、米人飛行家チャンピオンが、朝倉練兵場で高等飛行を行ない衆人を驚倒させたが、午後第二回の飛行で不幸「神田八枚橋の南方二町の上空に於いて機の左の翼を折断し、四千メートルの処より墜落し、腹を粉碎し両足折断惨死を遂げたりと、機はめっちゃ／＼にくだけたりと云う」「細川義昌日記」となる。また同日記翌七年（一九一八）五月一日には、「本日後藤飛行機に乗じ安芸より高知に来る」とあって、飛行機もようやく身近となって来た。

通信 すぐれた村政指導者西分村長小田玉城は、またすぐれ時代感覚の持ち主であった。西分村が将来の吾南平野の中心となるのを予想したのである。もちろんすでに同地増井は在町として栄えていた。ここに郵便局をと考えた玉城は、明治四十四年（一九一〇）二月二十八日と、翌年一月十一日、さらに大正三年（一九一四）十月二十一日と、三度にわたって近村々長の同意をえて、貴、衆両院議長に設置を請願する「西分村史」。同書によれば、明治四十五年（一九一〇）第二十八帝國議会で通過したようであるが、実際設置をみるまではと強く運動したものである。例によって合理的な小田村長は、該地域の戸数、人口、生産物の資料もあげている。該地に郵便局経営を支える力があることを示したものである。こうした書類は一般的とも思われるが、やはり先見とすべきであろう。しかしながら左表の示すように、西分局を含んで春野地方に郵便局のできたのは、ずっと後

諸木郵便取扱所	昭和 六・五・六
諸木局昇格	同 一五・一二・一
西分郵便取扱所	同 九・七・二六
西分局昇格	同 一一・四・一一
仁西郵便取扱所	同 一一・三・一六
仁西局昇格	同 一五・一二・一

のことであった。

いずれも満州事変後の軍事力増強中心の積極政策下に進められている。考えさせられることである。なお「細川義昌日記」大正八年（一九一九）三月十五日には、「吉川鉄猪長男新川郵便局と高岡郵便電信局間に、電話機電信架設申し出でに付き、其の筋運動方頼みに来る」とある。文意が十分明らかでないが、通信発達への動きのあったことは認められ、大正十一年（一九二二）新川局に電信、電話架設が認可となる弘岡上ノ村「村会議事録」。電信は明治三十年（一八九七）代から、電話も都市では大正期から国民のものとなっている。春野地方にもそうした要求の出るのは自然である。

前述大正期は第二の文明開化といったが、ここで春野地方に電燈照明が紹介されたことに付いて語ろう。すでに弘岡上ノ村「廿日会記録」によれば、大正二年（一九一三）電燈架設の声が聞かれ、また「門田益穂日記」大正五年（一九一六）三月二十四日には、「本日三分電燈料納付せり」とあって、早くも弘岡方面には電燈が架設となり、面倒な石油ランプ使用から解放される。また少し後れて「仁西村々会議事録」大正八年（一九一九）八月十四日には、追加更正予算要求の理由に「役場へ電燈を取りました故、之れに要する電燈料」をあげる。「細川義昌日記」にも、同年三月十七日に「本日居間へ電燈を曳く」とあり、さらに同年七月十四日には「森国江電燈料取りに来る」とあって、戸毎を訪れいろいろと情報も伝えた集金人も登場する。もっとも電線架設は不幸にして、「上田良助二男夫婦下男と偕に荷車を曳き切抜に向う途中、電信柱倒れ居て是れが電気に感じ即死、良助跡より馳せ付け是れ亦即死」同日記と一家四人即死の悲劇が生まれる。電気に慣れなかった時代だと思っ

ない。これに類する事故は今もけつして少なくない。なお「細川義昌日記」大正十一年（一九二二）八月六日には、「西分器械搗屋へ引き割麦」注文とある。麦飯の味を一変させた割り麦も、電気動力等により行なわれる。

教育の発達

教育内容の充実 明治四十一年（一九〇八）度より開始された、義務教育年限六カ年延長は、その後内容の充実を目指して大正期の教育を特徴づけ、理科、体育等の教科教育の充実が進められる。これはまた教員の自覚とも関係し、責任感に満ちた教師は輩出し、信念に従ってその懐抱する理想の実現を期して村当局に堂々と迫るものも出る。その適例として「仁西村々会議事録」春野町役場所蔵 から、大正三—四年（一九一四—一五）当時の同村仁ノ小学校長山下長太郎（一八七九—一九七〇）の意見を見ることにしよう。大正三年（一九一四）三月六日の同村会



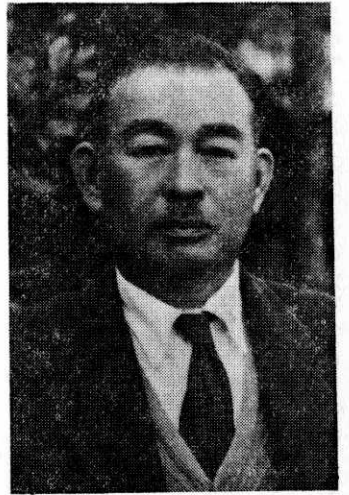
仁ノ尋常小学校長 山下長太郎

で、村長が「此れ迄は教員が議場に於て説明等をなさざりしも、前年よりは是等に就いては予算（教育関係）も教員に於いて立てさせ、且つ説明をもなさしむる事に成り居るにより」と述べたのに答え、山下校長は、理科教育振興のための予算を提出左の趣旨説明を行なう。

先ず教育の方針より御話し申したし、今の時代は日進月歩とでも申しましょうか。旧時代の教育とは全く其の趣きを異にし、たごよ仮令ば器械の如きは教師のみ試験せしも、たごよ今や生徒にも自から之れを試験せしむるが如き有様にして、要するに地図或いは標本其の他図表、器械の如きは教育上の原動力とも申すべく、教員にして如何に堪応なるものありと雖ども、之れ等完全なる設備なくんば完全なる教育を施す術なく、如何に立派なる医師と雖ども、器械なく薬品なくんば其の病源を根治し、其の疾苦を治療すること難からん。図表、器械の如きは医家に於ける薬品と云うべく、器械とも云うべくして、漸時に経済膨脹の今日、村の経済を顧慮するの要あるは勿論なれども、本村学校を他村校に比して如何であるかと云えば、遜色あるを認むる次第にして、村教育の為誠^{まこと}に遺憾とする処なれば、是非此の費目に対して御賛同あらんことを望む。

町村財政は、すでに述べたようにほとんど常に窮迫していたため、山下校長の提出した案は一部を除いて否決されたので、翌四年（一九一五）三月十五日村会には、たまたま弘岡における連合運動会参加のために、村会に出ることのできなかつた山下校長は、相当長文の「意見書」（同史料）を提出する。要求する理科器械は顕微鏡、身体模型、電話機、無線電信機であつて、これを三年計画で購入、うち本年は顕微鏡を是非にというのである。何故これらの設備を要求するかの理由として、同校長は「斯くも不完備なる学舎に育てられつゝある児童の将来は、実に寒心に堪えないと常に思つて居ます。又人情として責任として、他村の児童に劣るが如き児童を出すのは、私として誠に忍びない。是非共思慮深き涙ある諸君の同情に訴えて、此の土地より出づる児童をしてよしや他村に秀でずとも、通常肩を比ぶる丈の児童を養成したいと思つて居る次第であります」と述べる。職責を自覚する堂々たる態度というべきである。

いわゆる戦前の教師像—聖職的教師はこの大正期に完成したものであつて、いわば師範教育の一つの成果である。後年各地の校長を歴任し、とくに戦後弘岡中学の経営に、名校長を称せられた弘岡上出身石田定福（一九〇一—六三）は、青年教師のこの時期非常な読書家であつたが、同家には今も大正期出版の政治、法律、経済、思想等の多くの書籍が所蔵されている。そのうち



石田定穂肖像

修身教授資料集成 三浦関造
川島次郎

大正八年六月四日 隆文館発行

の裏表紙に左の書き込みがあった。

大正拾年四月拾七日

閑を得て出高、竹内書林に至り本書を求む。崇高なる人格は衆人
を感化す。吾れ感化の職にありて人格の尊きなし、あえて本書を
求め自己の修養に資し、衆人感化の資たらしめんとす。幸いに意
に適せんか。

ここにも責任感に満ちた青年教師がある。大正十年（一九二二）は、定穂が高知県師範学校を卒業した年である。職責に邁進する気魄とともに、「人格の尊きなし」という謙虚な反省もある。古きよき時代とはこれを指すのではなからうか。

第一次世界大戦と教師 前述「仁西村々会議事録」大正九年（一九二〇）十一月十五日には、追加予算を説明した村長の発言が、次のように記されている。

第一款教育費。中第一項第一目給料に於て、八百六十四円の追加を要するは、御承知の通り各官吏の俸給令の改正に伴ないまして、教員に対しても本年八月廿九日付本県県令第四十二号を以て、俸給令を改正されまして、従来の臨時手当は自然廃止されまして、本俸と成りましたので、之れが改正俸給令に取り直しますると、元教員五人に対する月俸平均二十七円六十銭でありましたのが、即ち月俸平均四十二円となりまして、其の内訳は仁ノ校長六十三円、小島訓導五十円、新階訓導四十円、西畑校長五十三円、前田訓導三十八円でありまして、右の金額の追加を要する事となりましたので「以下略」。

同史料から考えるに、大正八年（一九一九）より県内村により教員増俸問題が起り、同年八月、十月、同九年（一九二〇）十一月と増俸となり、一カ年余の間に平均二十七円六十銭から四十二円へと上昇する。大戦中からの激しい物価高に対して漸くとられた処置であって、同史料大正八年（一九一九）八月十四日には、「過日郡長より郡内各町村長が招集され」て訓示があったと、増俸の理由をあげている。物価高に抗議、増俸を要求する自由も組織もなかった多くの教師のなかには、ついに止むを得ず教壇を去る者もできる。辛うじて教壇を守るものは、前門の虎に対する後門の狼として、とみに激しさを加えた結核があった。聖職者とはこうした試験にもまれた受難の姿ともいえるようである。政府が、ついに義務教育費国庫補助一千万円を支出したのは、実は大正八年（一九一九）度のことであり、その後十一年（一九二二）度の吾川郡の小学校教員の平均給は、男五十三円七十九銭、女三十四円九十七銭「土陽新聞」となる。教員増俸は反面村の財政を圧迫したので、秋山村ではこの時点で甲殿、秋山両校の統合を企て失敗する。増俸によって教員の生活は一息ついたと云えるのであろうが、地主、自作農の出身の教員でなければ、家族を養い、子弟に高い教育を受けさせることはできなかったであろう。

自由教育 辛うじて待遇の安定した大正九年（一九二〇）から、昭和のごく初年までの小学校教育界を、旋風のように吹きまくったのが自由教育である。もっともこれに先立って高知県では大正五年（一九一六）芦田恵之助の影響を受けた、自由選題の作文教育が現場で取り上げられ、やがてこれが生活綴方へと発展するが、一般に自由教育は、画一を避けて児童の個性を尊重し、活発な学習活動に期待するものであった。したがって教師も児童も、それぞれ個性を伸ばして教室は限らない活気に満たされる。当時校長はなお上からも下からも強い束縛が少なく、部下教員に対して指導力を発揮できたが、とくに部下の活動に理解ある校長とは校長の理想像でもあった。ここにも個性發揮に通じるところがある。これは時代思想のデモクラシーから来たものであって、当時吾川郡視学であった公文羊子は語って云う。時代思想のデモクラシーすなわち自由平等の要求に対し、教育とくに道

徳教育もこれを無視することはできない。子の親に対する道に對し、親の子に対する務めもある。生徒に与える自主的、自治的な活動も問題になってくる。新しい修身教育が必要であって、いづれ現在のままでいつまでもよいとはいえない「土陽新聞」大正九年（一九二〇）というのであって、小学校教育監督者としてこの意見である。いわゆる八大教育思想が、現場の若い教師を擁にし、ナトルプかデュイカと範を泰西の教育学者に求め、あるいは篠原助市、稲毛詛風、小原国芳は好んで口にされた教育学者の名前であった。

「門田家文書」には、大正十二年（一九二三）四月二十五日付で生徒の父兄に宛てた、弘岡高等小学校長上田盛実（一八八五—一九六四）の教育方針の印刷物がある。この時点における自由教育の成果として割愛に忍びないものがあるが、何分に長文であるので抄出することにした。冒頭の総論では、「元來教育は学校のみの仕事ではありません。其の初めは母の胎内教育に始まり、家庭教育、学校教育、社会教育と引き続き相関係して居ります。即ち人は細胞の初まりより細胞の破滅に至る迄、教育の規範を離るゝ事は出来ません。随て其の居る所は何所も教場にあらざるなく、何人たりとも又教師たるの責任を否む訳には参りません。然るに現時は、子弟の教育は学校にのみ放任して顧みず、各自非教育なる家庭を作り、非教育なる社会を作り、児童の直接間接に感化を受くべき環境に汚点を印しながら、教育上の責任を学校にのみ帰せんとする状況にあるを恨むのであります」として父兄の協力を求め、さらに、「世界戦争は世の文明思潮に一新紀元を画しまして、従來の如き特権階級や軍国主義は影を潜め、世は糾然としてデモクラシーの基調に立って、あらゆる文化の均当を叫ぶ世となり、人は皆伝統的受動的の態度を捨て、創造的発動的の態度に進んで居ります」と戦後の社会の動向を要約し、したがって教育にも一大改革進歩の必要なことを力説し、同校の教育目標を「野蛮的肉体、文明的の精神」として総括し、そのためには「常々自分は人間として生きて居ると反省」に立って、六カ条の重点目標をあげる。「自治協同」「自

我実現」「自学」「運動」「義務」「経済」である。うち第一項の自治協同についての解説は、

子供は世話をやき世話をせねばならぬ者の様に考え、一から十迄世話を焼きますので、三十になっても四十になっても親さえあらば、やっぱり子供として世話をやかねばならぬのが、日本の家庭であります。この家庭を拡張したものが日本の村であり、郡であり、県であります。随て世話をやく事を急に止めたなら、日本の子供、日本の村、郡、県は独立が出来かねます。これでは前申した世界の風潮に竿さして渡れるでしょうか。されば私等は世話をやく事、世話をする事を少なくして、子供の事は大概子供自身で所置させましよう。そして困らして子供の内心の力を伸ばせましよう。よし彼等のなす事はまづとも、自治の必要と責任とを感せしめましよう。就ては小理屈を云わず、道理のある所には自分を無にして忠実に従わしめましよう。父兄たりとも子供の主張が道理にかなって居れば、喜んで従いましよう。

教育とは被教育者の可能性を伸ばすことにあるという。児童の「内心の力」に期待し、これを伸ばして自主性のある人間へと育て、世界社会にも通用できる人格としようというこの大理想は、まさに大正の自由教育の狙いであろう。上田校長のもとで宇賀延宜ら同校教員は協力一致し、学業に運動に、空前はもとより絶後ともいえる黄金時代を築き、前田重作、中山卯月、前田敏男、中内孟、松田義実、中内広ら俊秀を輩出したものである。大正の自由教育は、優等生の自由教育であったという批判があり、さらに表面的に飾られた教場での自由教育であったとも云われる。時代の制約は免がれないが、この時捉えた教育の理想には不滅のものがあると思われる。なお同校に明治四十一年（一九〇八）併設発足した弘岡実業女学校は、この期にいたって、地元的支持と学校の努力によって内容を充実し、大正十一年（一九二二）四月よりは、一般教科の程度を高める等教科課程も改められて、弘岡実科高等女学校となる。五月一杯は養蚕休業とする等土地の実状を配慮しながら、女子の中等教育を地元での要望は發展的に満され、卒業を前にしては遠く近畿、伊勢地方へも修学旅行に行く。同校々長門屋勇太郎（一八七九—一九五二）の、父兄に宛てた旅行の注意書「門田家文書」には、女子を旅行に伴なう学校側の細心の注意が

受講率七十二パーセントが第一位とされた所以である。前年の大正八年（一九一九）四月十七日の同紙には、弘岡下ノ村が補習教育優秀として県より表彰されている。「門田益穂日記」には、大正十一年（一九二二）八月子息瑞穂氏が青年団幹部として、神谷村（伊野町）で講習を受けたとある。なお「土陽新聞」によれば、同年四月吾川郡では婦人会準則を作り、同会の設置を呼びかけ、その事業として染色、家事の講習を奨励する。当時夜学会にも男女共学する場合があります、婦人会とは別に処女会として結成活動する所もできる。前年の大正七年（一九一八）二月の同紙は、弘岡婦女会の活動を伝える。

ところで第一次世界大戦後の不況の中で、農村、農業に問題が生じた時、以上のようないわば官製の青年教育にあきたらない青年の動きの出るのも自然である。世はデモクラシーであった。青年はその活動の場を「雄弁会

青年会員数	受講者数	教員数	経費	補助金	会場
二八〇四人	二〇八二人	一〇一人	一七七五円	一一三四円	五六

卒業生に「紀念規則」十三カ条を示し、卒業後青年として日夕これを服膺することを期待したが、これは「公民たるべき精神修養」を目的としたものであった。したがって教育勅語、戊申詔書を奉体すること、忠君愛国、国民皆兵を忘れてはならないことを真先にあげているが、注意されるのは、第四条に

愛村の要義は自治体の発展を図るにあり、其の発展を期するには和衷協同を基礎とす。統一は団体の生命なるべし。

と懇えたことである。当時西分村には村を二分する激しい対立があった。これを深く憂えたものであろう。「土陽新聞」大正八年（一九一九）六月四日には、吾川郡は当時高知県第一位の青年会、夜学会―補習教育の盛んな地域で、夜学会に関し左表の数があった。



吉良良吉氏蔵・運動格昇女高実科岡弘（状書幸雄口浜）

示されて心温るものがある。抄出すれば、

旅行地図や各都会の略図、見学所の大略等印刷として生徒へ配ってありますから御覧下さい。折角思い立った旅行が僅かの病気で行けんことになりでもしたら残念でありますから、風を引かんと、腹をそこなわんと。にお気をつけて下さい。

愈々二十九日の汽船に乗ることに決めました。成るべく手軽に行くように準備してやって下さい。

自由教育を支えるには、このように行き届いた教育実践が教育者に求められるのであろう。改めてこの期こそ戦前教育の最高峯期とするものである。

青年教育 前述したように、日清戦争後上から強力に支援された青年教育は、義務教育の補充、とくに軍隊教育の補強を目的に進められたが、明治末年より、さらにこれに思想善導の意味も加えられ、此の期大いに奨励される。とくにその主体となった青年夜学会を中心に、村単位に青年会が結成され、青年運動も展開するようになる。県では大正五年（一九一六）青年会準則を示し、その趣旨に則して青年会を指導したが、その第一条には「忠孝の本義を体し、品性の向上を図り、体力を増進し、實際生活に適切なる知能を研ぎ、剛健勤勉克く国家の進運を扶持する精神と素質とを養成するを以て目的」「土陽新聞」と謳う。まさに戦前教育の方針を示すものである。

「西分村史」によれば、大正三年（一九一四）二月二十七日同村では、尋常小学校



望遠社神楠

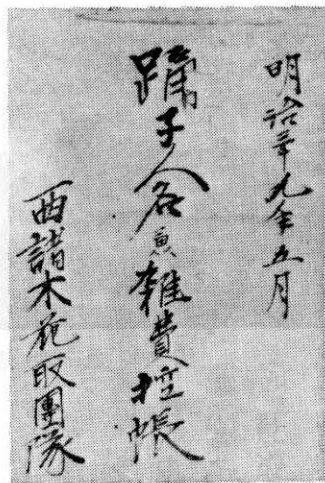
望遠社神楠
 望遠社神楠は、とくに秋の御神幸を中心に大正期まで盛んに繰り上げられた。たとえば森山八幡宮の神幸の歌に「穴山孝道氏採集」¹¹
 ちよまでや わかみやはふりまつる、ちりへっぼう、はじまりてさらえおとこ、
 わかはりしんでん。
 があった。また仁淀川原に繰り出された弘岡上ノ村八幡宮の神幸は、仁淀川橋の上手までで、ここで獅子踊りがあり、獅子をてがうチョンガリのユーモラスな所作に興じたのは、大正期まで続けられた。弘岡上ノ村には巨大な楠

近、現代の文化

を綴って同月二十三日に死去したが、岡崎精郎はその後農民運動の先頭に立って、地主勢力と戦う。細川義昌存命の場合は、両者の間に悲劇的な対立が展開したものと考えられる。義昌は死期を得たとも云えようか。

こうした青年自覚の時代ともなれば、相互理解に基いた結婚を求める青年が出るのは自然である。「細川義昌日記」によれば、後述農民運動の指導者岡崎精郎（一八九八—一九三八）は、深く義昌に傾倒してその居合術の指導を受けたこともあり、またしばしば義昌を訪ねてその説に耳を傾けたが、とくに医師北村茂の息女を妻に懇望、義昌にその周旋を依頼したが断られる。義昌が精郎の落胆を心配した後進に対する思い遣りに心を打たれるが、これに対し精郎は、直接「□女に逢い話し度く罷り在るに付、逢わせ呉まじき哉との申し込みあり、段々其の謂う処を聞けば、他へ縁付くは□女の不幸であるから、親しく御話し致したき事あり」と云う。誠に堂々たる態度というほかはない。当時の習慣に従って表向き人を立てて申し込むが、できれば自分の意志を直接に本人に伝えたい。それも親の諒解を得てというのであって、大らかな気宇を示すものである。義昌はこの心中を理解し精郎の申し出に躊躇する北村茂に対し、「精郎の理想の高き事、希望且つ□女を信用せる事、敬愛せる事杯委細申し且つ彼の直接面談」について説得している。説得は不成功に終ってついにこの話しは結実しなかったが、こうした堂々たる青年の出ることも時代であったと云えよう。精郎が教育を受けていたこともあったが、そこにはやはりこの時代の風潮のあったことが考えられる。細川義昌は、大正十二年（一九二三）二月十四日まで日記

に求めてさかんに意見を發表したので、さながらに自由民権運動の再現の觀を呈した。その絶頂は大正九—十年（一九二〇—二一）であって、吾川郡では八田村、神谷村（伊野町）等でもっとも盛大に行なわれ、ついに大正十年（一九二二）四月二日の高知市堀詰座に於ける擬国会となった。県内各地から有為の青年が代議士として出場し、軍縮、普選等を論議した。まさしく時代に相応しいものであった。この時諸木村より三井重則、高橋豊一、川崎以生の三名が代議士として参加する（「土陽新聞」）。弘岡上ノ村に仁陽協会が深瀬薫氏指導のもとに活動したのも、この期であった「回想雜録」。



「踊子人名并雑費控帳」
(土居左富氏蔵)

を神体とする楠神社がある。明治四十一年(一九〇八)三月この楠を樟脳用にと買い取った人が、いざ伐採にかかるとたちまち村人の激しい抵抗を受け、ついに伐採中止となった。今も楠の根元に当時の傷痕がある。子供の命の守り神として尊崇されたことが原因であるが、こうした信仰が、古い貴重なものを長く後世へ伝えることが多い。

十九年(一九〇六)の同地の民俗芸能太刀踊り花取の記録であって、踊子三十一人の人名、音頭取二名、周旋人二名、踊りの題名、収支決算等が克明に記されている。周旋人の記録と思われるが、こうした熱心な人のあったことが、協同体の支えをいつまでも続けさせたものである。同地の若一王子神社には、巨大な太鼓が保存され、大正期まで虫送りの行事もあった。虫送りの効果とは別に、そうした伝統への愛着は評価される面がある。仁ノ竹崎正哉氏(一八八七)よりの聴込みによれば、同地の太刀踊りは西諸木と好一對をなしているが、一度衰えたものを同氏と新階杉太(一八九三―一九六五)によって大正期再興される。新階又次郎(一八六四―一九四六)が音頭を幸いに記憶していたのを習ったという。音頭は正哉氏によれば、忠臣蔵を簡略に歌ったものようである。あるいは近世後期以後―化政文化―この踊りは農村の繁栄のなかで受け容れられたのであろうか。

なお大正期の芸能の復活については、「細川義昌日記」にも、秋山村でえじまの流行した記事がある。秋山の岡崎正直氏らよりの聴込みによれば、同地のえじまの音頭には「ころは睦月の末っ方、春めきながら冴えかえる、袂のつら、時しらず」ではじまるものがある。またさしおどりの音頭は那須与市を歌ったものであったとい

う。仁淀川を挟んで対岸の高東各地でも、大正中期大田陣を組んだ盛大なえじま踊りがあった。吾南各地でも同様であったであろう。東諸木八幡宮の「カミデン行事」―どろんと祭も伝えられている。

ここで特筆すべきは、西畑人形を興隆させた新階楠松(一八七〇―一九五四)である。楠松は仁ノの生まれ、先輩に西畑の大工で器用な柳井十蔵(一八三三―一八九一)があった。洋傘の骨で人形を使ったという。「高知県人名辞典」によれば、楠松は「カイツリ」に、卵の殻に目鼻を描いた十蔵の人形芝居を見て感じ、そのいわば一座に加入したが、強い独創力によって一座のリーダーとなり、人形製作、台本、衣装、舞台装置、照明まで工夫する。仁ノ、西畑一丸となって西畑人形劇団を組織したのであって、県下はもとより九州、中国辺までほとんど年中興行する。西畑での聴込みによれば、十蔵期の出し物は浄瑠璃物であったが、楠松はこれを浪花節物に変えたという。時代の動きを捉える機敏さを持っていたといえよう。また一座には矢野岩吾、柳井定吾、安岡寅鹿らがあったという。西畑は仁淀川下流の水害地である。とくに明治十九年(一八八六)の大洪水に多くの耕地を喪失した。川原えんどう、川原西瓜はこれに直接対応した工夫であり創意であった。西畑人形もまた別の意味での洪水対応策と考えられないだろうか。現在西畑人形は、もはや完全に歴史となって仁西地方からその姿は消えた。しかしながら高知市の人形劇団ピコロ座に受け継がれ、全国的にも有名になった。

学問、技術 明治前期以来教育の普及向上とともに、春野地方からも郷里を出て、高知あるいは遠く県外に学ぶ者が数多く輩出し、全国的にも知名の学者が出た。これらの人びとは多くは地主層の出身であった。「細川義昌日記」によれば、義昌は東京市、神戸市に学ぶ養子細川義方、甥田所義雄に熱心に送金する。小作の汗は地主の収入となって、こうして日本の近代文化を支えたものである。

「高知県人名辞典」によれば、文学博士、文学博士、学士院会員小島祐馬(一八八一―一九六六)は、弘岡上ノ村出身、京



廣田孝一肖像

春野村(町)史の編纂にも関心があった。春野村(町)史といえは、すでに曠古の名著「西分村史」(小田玉城著)があったが、公民館長を勤めた中村忠(一九〇九—七〇)も熱心に史料を収集したが、不幸完成を待つことなく世を去った。また秋山村出身川島哲郎氏(一九二二)は、東京帝国大学経済学部卒、高知大学教育学部教授で経済学を担当である。同大学文学部教授の関田英里、西沢弘順氏らと共同研究—調査で知られている。

以上とは別に、苦心によって新しい道を開いた人に弘岡中ノ村出身森岡馬治(一八五九—一九三七)—玄道がある。「玄道碑」によれば、四国遍路より伝えられた弘法大師の秘法の灸術をも

都帝国大学法学部卒業後、中国に渡ったが排日運動激化のため帰国、さらに京大文学部に再入学して支那学を研究、その後京都一中、三高各学校に勤務後京大に招かれ、さらにフランスに留学して研究、帰国後は京大において中国哲学史等を担当、ついで文学部長、人文科学研究所初代所長となる。著書には「古代支那研究」、「中国共産党」、「中江兆民」等がある。本県では四人目の学士院会員として高知県を代表する碩学であった。なお弘岡上には龐大な文献を所蔵する書庫が現存する。小島博士が、河上肇博士の信頼を受けたことは、河上肇の「自叙伝」に示されるのであって、当時危険人物として圧迫されていた旧師に対する、小島博士の勇氣と誠意を窺うことができる。なお「安並家文書」によれば、帰郷後安並馬吉と交わり、その質問にも親切に回答する。揚田武実氏は、また農地改革の時小島博士は地主委員となったが、終始きわめて公平な論議であったという。春野の恩人野中兼山を尊敬し、春野地方合併当時、新村の名称を春野村とし、「兼山先生の恩沢を永久に記念」するようにと、初代村長に進言する。博士のごときは、郷土とつねにともにあつた戦前の人びとの姿であるが、現在なお改めて考えねばならないことであろう。

藩政後期、富農深瀬氏より学問を愛好する人材を出したことについては前述したが、「高知県人名辞典」によれば、深瀬基寛(一八九五—一九六六)は、その流れを近代に発展させたものである。弘岡上ノ村出身の英文学者深瀬基寛は、三高をへて東京帝国大学文学部を卒業、後京大大学院生となる。その後松江高校、三高の教授を経て京大文学部教授となる。著書「エリオット」は第一回読売文学賞をえたが、その他「政治の彼方」、「英国の国家構造」、「文化とはなにか」、「現代詩論」等多くの翻訳および「日本の砂漠のなかに」、「乳のみ人形」等の随想、評論がある。また東諸木出身川崎齊一郎は、東京帝国大学卒業後(一八七七—一九四七) 法律家となり、とくに大阪方面で弁護士として活動した。

さらに弘岡上ノ村出身橋本重隆(一八八七—不明)も、東京帝国大学理学部卒業後東京、横浜の両高等工業学校教授を勤務したが、弘岡下ノ村出身の前田重作(和彦)(一九二—一四七)は、高知県師範学校卒業後文部省検定試験により中等、高等教員数学科の免許を受け、さらに東北帝国大学に学び、後同大学勤務となる。数学者として将来を嘱望されたが早世した。弘岡下ノ村出身工学博士市原通敏(一八九九—一九四三)は、東北帝国大学教授から陸軍技師となり、科学兵器研究中戦車の実験に殉職した。また現在活躍中の科学者には、京都帝国大学工学部建築科出身、建築設備、環境工学の権威であり、京大工学部長、同学長に選任された前田敏男氏(一九〇八—)があり、東北大学大学院卒同大学助教授の安並正章氏(一九三五—)は化学専攻である。また芳原村出身の広田孝一(一九〇八—六六)は、現在も土佐市高岡町で開業、名医を讃えられる広田耕作氏(一八八一)の長子で、京都帝国大学文学部卒、高知女子大学教授であった。民俗学に造詣が深く「寺川郷談」の研究に情熱を傾けた。また春野村(町)史の編纂にも関心があった。春野村(町)史といえは、すでに曠古の名著「西分村史」(小田玉城著)があったが、公民館長を勤めた中村忠(一九〇九—七〇)も熱心に史料を収集したが、不幸完成を待つことなく世を去った。また秋山村出身川島哲郎氏(一九二二)は、東京帝



森岡「玄道碑」(弘岡中南部)

救済運動に努力し、「光を踏んで」の稿料で点字図書を購入母校に寄贈する。昭和二十九年(一九五四)へレンジャー賞を受けた。同じ森山村出身塩田利福(一八八八—一九六八)は、すぐれた製紙技術家として県内外、中国にまで活動、高知県文化賞を受けた。晩年は美術紙の開発に創見を出した。

文学 弘岡出身安並梅所(正晴・一九二〇)は、各地の中学校の漢文教師を勤めながら、大正—昭和期の土佐第一の漢文家と評せられたが、一般に春野地方の在地文学は、伝統の俳句および和歌が主であって、大正期の興隆は養蚕業の興隆と一致する。青年層に愛好者の多かったのは大正デモクラシーの動きであろうか。

まず和歌に仁ノの橋本一郎(一八九五—一九五二)があった。弘岡高等小学校卒、同校教育の一つの成果である。独学で西洋思想にも通じ、ロマンローラン、ニーチェに私淑する。村政困難のなかで三期村長を勤務した。「南人」「あおすげ」等の歌誌で県下の活動したが、仁ノで戦前「濤音」を、戦後「笈」をガリ版で発行する。佐藤いづみ氏の撰歌に

海ぞひのわが村なれど今宵ことにとどろく潮をあやしみつきく

身にあまるなげきをもちてきくものかさ夜の渚の網引きの声

曇りたる海にのぞみて夕山路下るわが身は鍬肩にせり

昭和三十九年(一九六四)二月仁ノの文庫の鼻に建設された歌碑には、

遠海の輝く見つゝわが居るやこの山の上に月蒼く照る

とある。碑は雄大な大洋を背景に印象的である。字は竹崎玉子氏の書、また碑は吉永仁助氏の刻したものである。

橋本一郎の伝統は今も絶えてはいない。仁ノの新開寿男氏(一九〇三—)は、登潮の雅号で全国的歌誌「アララギ」昭和五十年三月号に、左の和歌を載せられた。

若き日に農に生きむと思ひ定め生きし七十年平凡なりき

いつの日に帰るかを知らず飛行機に乗りゆく子らを涙し見送る

朝明の冷き庭に立ちて我が幾度も深呼吸を繰返したり

また同じ仁ノの山北仁志子氏(一九二九—)は、昭和三十九年(一九六四)の「短歌芸術」に、

幾日かの田植を終へれば哀しきまでに日焼けし顔が鏡の中にある

日の暮るるを惜しみつつなほ野良にゐる吾が背にいつしか月影おちる

きびしき寒さ語りて夫と共に川を渡りつつ見る奥山の雪

このような労働のなかにこそ、芸術はほしいものであり、また生まれるのではなからうか。

また木戸昭平氏御教示によれば、戦後諸木出身尾仲愛子氏(一九二二—)に、

日に一度子を眠らしに来る墓所げんのしようこの花踏みつつ来る

わが庭に次々赤き椿咲き朝は散り敷く数限りなく

って、難病に苦しむ多くの人を助ける。難病に苦しむ人は今も昔も多い。救いの神の思いである。碑文に「各地到る処翁を待つこと救世主の如し」とあるような信頼をえたものである。また森山村出身で、後高岡郡大野見村に嫁した吉岡玉恵(旧姓島田)(一八八八—一九五四)は、徳島高等女学校卒業後緑内障を病み、ついに二十六才で失明したが、この不幸に屈せず、夫の死後高知県立盲学校に学んで鍼灸術を修め、吉岡流鍼灸術を開



川田十雨肖像

同地出身正木よ氏（一九三六）に、

しまい湯に浸りて虫の音聞きぬ月の光の未だ薄き庭
乾しにゆく蘭草を高く積み上げストラック揺れて香をばらまく

にも大正期の姿がある。句集「小望」によれば、大正六年（一九一七）弘岡で親芋会をつくり同志と句作に励む。号を十雨と称したのは大正十三年（一九二四）であって、さらに昭和六年（一九三一）高浜虚子来県を期に竜巻会をつくり、県下俳壇を指導する。戦後も活動を続け俳誌「勾玉」を昭和二十三年（一九四八）より発行する。句集には「小望」のほか「良夜」がある。いま春野地方の田園風景を詠んだものを次にあげよう。

稲妻のはたとうつりし野川かな

道かけて大きな暈や誘蛾燈

門前や蚕の蛾流るる舞ひながら

土用浪碎きし巖はかくれけり

畦塗りの鎌のもとより螢とぶ

十雨よりも先輩で同じ年に死んだ若尾瀾水（庄吾・一八七七一―一九六一）は、弘岡下ノ村の豪農（二十町地主）の家に生まれ、東京帝国大学法科を卒業する。その経歴は「高知県人名辞典」に詳細であり、また「若尾瀾水俳論集」は、その作品を集大成している。俳人というよりは俳句批評を得意としたといわれる。典型的な地主とし

て生きたのであって、一生職業を持たず文人的生活を送る。したがって趣味は高雅で俳誌「海月」を主宰したほか、多くの図書、美術品を愛蔵したが、その一部は高知市民図書館に死後収められた。農地改革前より地主経営は行き詰っていたが、戦後は土地を手放して高知市で死ぬる。大正十年（一九二二）四月の「海月」発刊の辞は、地主制破綻と地主の苦悶を示して注意される。今、若尾家の墓所に瀾水の左の三句が刻まれている。

鯛売りと連れ立つ春の山路かな

走る子よ麻の上るがうれしさに

鶯の子の兔をつかむ藪かな

最後のは愛児を喪った親の嘆きである。なお「安並家文書」には、戦後弘岡上ノ村で俳句を愛した人びとの句作が収められている。石田定福も水村の号で参加する。この地方に俳句の伝統のあったことがわかる。

戦後高知大学在学中に、川田十雨の指導を受けた森山村出身の橋田憲明氏（一九三三―）は、洋画もよくし、写真とロマンの調和した句を詠み、すでに句集「足摺岬」を出版した。左に数句を紹介しよう。

足摺へ遠く銀河にそふて来し

船進む蹠の椿をまなかひに

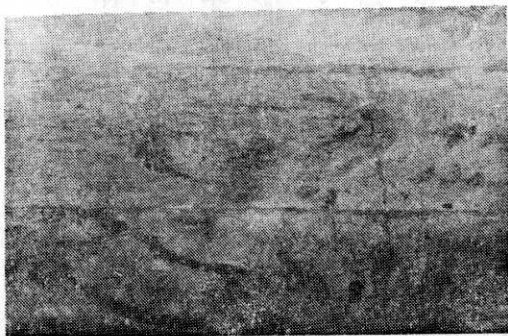
燈台の障子に明り遍路宿

母とはに若く在せわれ卒業す

姉追ふて織子を志望卒業す

同氏は散文も好くし、前述「若尾瀾水俳論集」は主として同氏の編集になるものである。

つぎに弘岡上ノ村出身で、現に高知市役所勤務の今井光枝氏（旧姓深瀬）（一九一五―）は、詩人、故今井嘉澄の夫人で、詩集「孤独の匂いの」を出版している。同書の序に「孤独と自由を抱いて、淋しさを超えて生きよう



甲殿住吉神社額（岡崎精郎筆地引き網）



中山卯月肖像

三好源美氏（一八九七）は、最近「昔の新川を偲びて」としてその追憶記を簡明にまとめられた。本書にも引用したところである。また高橋秀城氏（一八九一）は、橋詰延寿氏と共著で「諸木の記録」を出版した。よくまとまった好読物である。

美術等 弘岡高等小学校が大正期学業と運動に成果をあげたことは、中山卯月（一九〇七—一九一九）の活躍条件であろう。高知師範学校卒業後教職のかたわら陸上競技会に活躍し、ついに昭和四年（一九二九）四百メートルに五十一秒六の大記録を樹立する。この記録は昭和三十二年（一九五七）、弘岡中出身で東京教育大学卒（現在高知大学勤務）の前田幹夫氏（一九三四—）の五十秒八によって破られるまで、実に二十八年間高知県記録として輝いたものである。「高知県人名辞典」。また前高知大学教育学部教授上田蔵刑氏（一九〇七）は剣道七段、山下崇雄氏（一九三七）は高新スポーツ賞バレー個人受賞、細川幸雄氏（一九四一）は昭和四十九年（一九七四）アジア大会で射撃に優勝した。

明治初年南画家として前途を嘱望されながら、若くして逝いた弘岡上出身橋本小湖（一八五七—一八九一）のほか、高知県における農民運動の父といわれる岡崎精郎（一八九八—一九三八）は、県立第一中学卒業後、上京して絵を寺田季一および岸田劉生に学び、風景画を好くした。その作品で秋山に伝えら

とする女人」の作品と評価されている。

夢のかけら

かすかな夢のかけらを抱いて

後生大事に佇んでいる女

触れればこわれてしまふ

夢のかけらを

「孤独の匂いの」

評価は当つていると思われる。⁽¹³⁾

広く文学に含めて、ここで大正期弘岡上ノ村出身の深瀬薫氏（一八九四—）が、全体的に展開したお伽話に付いて述べる。同氏は近世深瀬氏の直流で、早稲田大学英文科卒業後久留島武彦、巖谷小波の指導によって「お伽話」の道に入る。一万回講演を目標に各地に講演を行ない、巧みな話術で聴衆を魅了した。また昭和七年（一九三二）三月には、児童の芸術教育施設として、みのり学園を高知市に創立現在にいたっている。

なおここで日記について触れておこう。本書でたびたび引用した「細川義昌日記」、「門田益穂日記」は、文学的作品ではないが、時に情感を交えた文章は、リアルな筆致と相まって読むものに深い感銘を与える。また義昌の母細川梶（一八二六—一九一四）も、長い期間にわたる日記を残している。熱心なクリスチャンであった梶は、毎日のように、「夜分御恩みによりて安らかに寝に着く」と神に感謝するとともに、家族の生活を「義昌は朝早々鷹匠町へ往く、さんみ祈禱をする。お千鶴（義昌夫人）は昨日も今日もぼた糸を取る。小女（女中）せんたくをする。ふとんとくとく」と書き残している。きちんとした地主の家の主婦の姿を示すものである。門田益穂の長子門田瑞穂氏（一九〇一—）も、大正—昭和と半世紀を超える日記を書き続けている。後述するところである。なお

れたものに、「細川義昌肖像」等があり、また甲殿の住吉神社には「地引き網」を引く海岸風景がある。いずれも力強いタッチで大正期の青年の意気高いものを感じさせる。また安芸郡田野町出身で、後弘岡上に居を移した洋画家山本茂一郎（一九一五—六六）は、小磯良平に師事して日展に入選、文部大臣賞を与えられ、またフランスに留学、高知県洋画の雄となったが、不幸不慮の火傷によって急死した。その作品には「小島祐馬博士像」、「岡本梅子夫人像」、「画家O氏とそのモデルたち」、「O先生の像」がある。つぎに現在も活躍中の秋山出身の洋画家小松明氏（旧姓岡崎）（一九二四—）がある。創元展、日展、朝陽展等に出品して認められ、またヨーロッパ、アジア各地の取材研究旅行によって技を磨き、一葉会を結成して同志と活動する。雑誌「形象」五号では「小松明の悲愴」として評価される。その作品に「石灰工場」、「臨港地帯」等がある。なお現西分住中山粘氏（一九二一—）は欄間彫刻の製作に励んでいる。

註1、「門田益穂日記」には、当時物価高に苦しむ警察官の悩みが記されている。事情は一般的であった。

註2、平年作で一反に付き米一俵一四斗（六〇キログラム）が小作の手許に残る仕組みであった。これは労力を正當に評価すれば当然赤字となるものであった。

註3、この時点こそ、野中兼山直伝の井堰技術と、西洋近代技術との接点である。セメント、ボルトはこれを象徴する。

註4、生産力的な細川義昌さえ、土地改良に投資したのは、前述大正四年（一九一五）分ただ一度であった。

註5、仁ノの歌人村長橋本一郎は詠んでいる。

蚕庭を織るといふせく納屋ごもり日をふるままに春ざりにけり

いくる世のわが寂しさはいはずもあれ納屋に籠りて庭を織るも

雑舎とやに入るとや織の音してむしる織る手もとをぐらくなりにけるかな

註6、前田千代子氏によれば、弘岡上ノ村では稚蚕共同飼育を、同村小学校校舎で一度行なったことがあったという。

註7、大正期とはけだし過渡期の特色を発揮した時期であった。

註8、筆者はこの時尋常小学校四年生で、担任別役重平訓導の自由選題の発刺たる綴方教育に感銘した記憶がある。

註9、同校の活発な活動は、たとえば大正十年（一九二一）の県下高等小学校相撲大会、同継走大会での優勝が語っている。

註10、吉良禎吉宛浜口雄幸の書状—実科高等女学校への昇格周旋—が、吉良良吉氏宅に所蔵されている。

註11、「門田益穂日記」には、荒倉神社の祭礼に当家となって「オハケ」立てをしたことを、感激的に記している。

註12、小島博士の野中兼山尊敬が契機となり、高知県文教協会は「野中兼山関係文書」を編集、兼山関係史料を集成した。

註13、「高新文芸」「高知新聞」によれば、春野町には文芸愛好者が多く、葛岡伊佐緒、夏木健、西込むつ、新階博彦、高橋絹枝、中山健、中山恒水、中山恵子、吉永仁風の諸氏の俳句、詩が入選している。